

「秤の本地」他解題 國學院大學図書館善本解題 II

徳江 元正

三 「秤の本地」(仮題) 一軸

前稿「熊野縁起」二本と、内容面で関わりのある〔秤^{はかり}の本地〕を、まず採り上げてみたい。

書誌をあら／＼記すと、本作は、天地凡二九・三糶、横凡四〇／＼五〇糶ほどの料紙を一六枚継いだ写本一軸で、漢字交じり平仮名文、一紙は原則として二十一行書き、横凡二六・四糶の薄茶渋紙表紙に題簽なく、〔秤の本地〕は、内容に即して付した仮の題である。即ち、本作冒頭に

抑はかりのほんちをくわしくたづね申に――

とあり、第四紙後半部から書き起こされる「秘伝書」の冒頭も

抑れんちやくのほんちをくわしく尋申に――

とある。本文中、「秤」の漢字は用いていない。すべて、仮名書きである。しかし、室町時代の辞書類は多く「秤」・「秤子」の字を掲げているので、書名としては「秤」の字を採りたい。△註1▽

次に、用紙の寸法と、一枚に書かれた本文の行数とを記しておく。

第一紙	横凡一四・九糎	六行
第二紙	横凡四五・三糎	二二行
第三紙	横凡四五・二糎	二二行
第四紙	横凡四〇・五糎	一二行
第五紙	横凡四〇・五糎	二三行
第六紙	横凡三九・七糎	二二行
第七紙	横凡四〇・〇糎	二四行
第八紙	横凡四〇・三糎	二二行
第九紙	横凡四〇・三糎	二〇行
第十紙	横凡四〇・三糎	二二行
第十一紙	横凡四一・三糎	二三行
第十二紙	横凡四〇・三糎	二二行
第十三紙	横凡四〇・一糎	二二行
第十四紙	横凡四〇・三糎	一九行
第十五紙	横凡四〇・三糎	一八行
第十六紙	横凡四〇・三糎	二二行
第十七紙	横凡一九・三糎	四行

以上全十七紙

本文は、なか／＼能筆で天地いっばいに記され、不統一ながら濁点も付し、朱の合点をつけ、句読を示す。印を、行の中央に朱で施している（濁点も一・二の例外はあるが、やはり朱で示している）。内容は、秤の由来、連尺の由来そして商人の由来と三

部から成るが、中世の商人の実態を窺い知る資料として貴重であるのみならず、長短の仏教説話が引用されており、広義の御伽草子の一つと見てよからう。

「秤の本地」という本地とは原義を離れた用法で、ここでは始源に就いてのものがたり、程度の意とみて差支えなからう。仏神の本縁・転生を説くのではなしに、その起源に関するものがたりを本地と呼ぶ例には、例えば「時計の本地」（本学図書館蔵、写本一冊、孤本。文政写、五段本。御国浄瑠璃の^一か）があり、これは、時計の発明にまつわる語り物である。あたかも、縁起が本来の宗教的な機能から離れて単にもの^がたりの意として、『滝口縁起』（京都清凉寺蔵、奈良絵本、一冊）とか、『武蔵坊絵縁起』（ダブリン、チェスター・ビーティ図書館蔵、絵巻、三軸）などの用法と軌を一にするものと見てよからう。△註2▽

本作は、現段階では他に全く伝来することを聞かぬ孤本であり、中世の物語・草子また語り物を研究する上でも、このような実務と虚構とを綯い交ぜにした作の存在は珍しく、かつ十分活用すべきものであろうと考える。最初に引かれる仏教説話、しゅび大王（正確にはシビ、尸毗大王、何故に拗音表記にしたかは不明）の故事は著名なものであるが、ここで説かれるごとき、筆をもって秤の起源とする話柄は、御伽草子には採り入れられることがなかったようである。商人即山伏でこれを熊野権現の本縁に結び付ける語りも、私は寡聞にして知らない。

「商人」はどのように訓んだのであつたらうか。仮名で訓みが付されていないので、なんとも言えないけれども、室町期の辞書類には、アキヒト・アキウド・アキンドの三様が記されており△註3▽、いずれにせよ、中世文学の研究者ならば、耳にするだけである。例えば、「職人歌合」の中でいちばん古いとされる『東北院職人歌合』△註4▽に商人が扱われており、手許にある絵入写本（寛政元年、三熊思孝の模本を、天保丙申七年に得山居碧瀟が写したもの）を見ると、十二番は商人と泉郎人^あとが△月△と△恋△の題でそれ△詠△んでいる。商人の方は

もろこしの入江の月をすておきてむかしもかくや世を渡りけむ

命にも身にもかへんとおもへどもあふ事をうる市のなきかな

とあって、その判詞に

左哥、潯陽江の月をおもはれたるにや、誠に世をわたる心さし、昔も今もかわらぬ事なれ共、范蠡か五湖の浪に棹さししこそ思ひ出られていとあはれにこそ

左、逢に命をかへんとおもはれたる、さもとおほえて、恋の哥ハかやうにこそよま、ほしけれ

と見えている。絵は、烏帽子を冠り、草鞋を履き、身の丈に近い大きな千駄櫃を連尺で背に負い、右手に唐傘を持って道行くさまが描かれている。『田植草紙』の一こまにも、商人と千駄櫃と、その中に収められている花紫とを詠みこんだ恋の歌が見えており△註5▽、渡唐の商人と聞けば、直ちに説経『をぐり』の後藤左衛門の言い立てが想起されよう。△註6▽

諸国を巡り歩く商人は、既に説かれているごとく、商品のみならず情報の提供者・運搬者であり、時には説話の管理や伝播にも関わっていたものと考えられる。軍記物語を読むと、西海へ落ちのびて行く平家の公達と、都に遣されたその家族との間を、商人が何度も往復しては消息を運ぶ役目を果たしている。また、例えば、かの『文正草子』に見られる商人のありさま。「見ぬ恋」となり給うた二条の中將殿は商人の真似をして、草鞋・直垂姿に身をやつし、いろ／＼の売り物を千駄櫃に詰め込み、東の奥をさして下って行ったとある。目的は、常陸国の文正が鹿島大明神の御利生として賜わった姫御前。三人を伴って、文正の館を訪うや売りことばに花を咲かせ、所望のままに二度・三度と述べたてる。あるいは幸若舞曲『笛之巻』に登場する、主役とも言うべき淀の津の商人弥陀次郎。かれが牛若の母に売った笛の出どころを聞かんものと、鞍馬山の牛若は弥陀次郎を召すや、かれは庭上で弘法大師に纏わる笛の由来を長々と語り、「おもしろしく、弥陀次郎、祝ひに三度語れ」との所望に任せ、仏神の加護にあずかることができるという重宝の楽器のいわれを、お返し語っている。弥陀次郎という名も奇怪な名で、背後に中世の語り部を推測したくなるが△註7▽、それはそれとして、本作の価値は、中世商人の実態、あるいは系図の存在のみに止まらず、是非とも書き遺しておく必要のある家の由緒であることが、その奥書の記述から知り得るのである。即ち

信州小縣郡白鳥庄海野ニ住長明翁雑談

とあり、簡潔なる一行ながら、「海野」と「長明翁」の文字に注目せねばなるまい。

海野はかつての北国街道の宿駅であり、現在の信越線田中・大屋間の東部町の一部であると考えられる。そして、長明家は、

本作で語られているごとく、商人の濫觴に関わる四家のうちの一であり、室町末期の写とおぼしき〔秤の本地〕一軸が、史料としての価値をも有するものであることを、雄弁に物語るものと言ひ得よう。

次に、本作の梗概を記してみよう。第一部は秤の起源を記す。

中天竺檀特山のしゆび、大王は慈悲第一の人であった。ある時、普賢菩薩と八幡神とがかれの心を試さんものと、鳩と鷹とにそれ〴〵姿を変え、鳩は大王の膝の上にとまり、鷹は梁にとまった。鷹がしきりに鳩を求めるので、大王は鳩を出すかわりに我が身の肉を出したところ、鷹は、鳩の重さの分だけ取ろうと難題を出した。大王はその時、筆の中央部を糸で結んで下げ、一方に鳩をかけ、一方に我が身の肉をかけて、その分だけを鷹に差し出した。そして、六波羅密の行の中でも捨身の行ほど物憂きことはなしと言つて、一首あそばされた。

是やこのし、ふのたかに身をこわれはとのおもさにかくるぞし、を

すると、鳩も鷹もかき消すごとくに姿を消した。大王が自分の身をしらべてみると、肉を切り取った痕はなかった。

その後、善導和尚の時代に、秤というものは始まった。また、秤の目盛が三百六十目であるわけ、星の宮で秤の目をつもること、目は天の二十八宿、地の三十六ぎんを表わしていること、寸は一尺二寸であること、須弥山の丈は八万四句を秤に表わしていること、商人は正直を宗とし、慈悲をもつばらとせねばならぬこと、須弥山が東西南北いずれの方にも傾かぬ故に、天竺では筆の中を結うて秤とすること等を記す。

さて、秤を我が国へもたらしたのは、行基菩薩であり、秤に金を押さぬいわれは善導和尚の故事によるのだ。折れた秤を持つてはならぬ、須弥山が折れた例はない。商人は無精なる者ではあるが、秤一棹持たではかなわぬものである。「よく〴〵是を心得べし」と結んでいる。これらの条々は、「二へ——」と合点を付して書き起こされ、箇条書のていで次から次へと商人たるべきものの心得、その根拠たるべきいわれ、商人の故事来歴が書き記されている。

第二部は連尺の由来で、第四紙「秘伝書」の項のもとにつらねてある。

天竺で、阿修羅・迦留羅・きんなう・まこらが天に対して障碍をなした折、帝釈天の壇の上に一丈五尺の虫が二筋出来した。名を付けたとした折も折、文殊菩薩は一筋をそし、一筋をほつすと命名された。文殊が恒河川の水上に壇を築き七日七夜行をした折大日如来ご覧あるや、虫は生をかえて一丈八尺の縄となった。大日はほんじやくと命名し、仏生国であるからして仏のもてあそびものとなった。その後、天竺摩迦陀国の大王が、この縄を所望せんものとご覧になるや、縄はかき消すごとくに失せてしまった。文殊の御寺へ戻ったのである。さて、大唐の孔子の御代に、二人の使者を仏生国へ遣わし、文殊に乞うてその縄を越の国へと移した。それを容物いれものに入れ番をさせておいたが、蓋がひとりであいて、縄は仏生国へ帰ってしまった。大唐で編尺と名づけたその縄は、再び乞われるままに、仏生国からつづらに入れ七ところ結び揃えて寄越した。孔子が蓋をあけてご覧になり、手に持たれたことから、これを手縄と言うようになった。この縄、大唐で七十五年の歳月を送るが、五ツの国が越の国へ乱れ入った折、この編尺は張良に獲られて漢の高祖にもお目にかけ、張良はこの二尺八寸の縄を鞭として用いた。かれが黄石公から兵法の秘訣を相伝された時もこの鞭を腰に差していたし、この鞭でもって張良は天下を治めることができたのである。また越王が会稽山に閉じこもった折、陶朱公一人を伴って三年の間過ごしたのであったが、陶朱公と張良とが和談するに及ぶや、陶朱公はその鞭を張良に乞うた。そして主君に暇をもらい、陶朱公は海の中のかうなんという島に新たに屋敷を構え、かの鞭でもって測にいけすを放ったところ、一寸の魚が一夜のうちに一尺になり、一尺の魚が五尺になるという有様であった。この編尺でもって測かれは商いをはじめ、三百六十六ヶ国の欲しいものを買取り、売りたい物を市で売った。その後、大般若経が日本に将来される時に、十六善神は三ぎう菩薩とげんさう菩薩の兩人を近づけ、仏生国から大唐へ渡って来た編尺を、大般若経の荷縄として日本へ寄越すよう命じた。即ち、これを日本紀伊の大神殿が受け取られたのである。

第三部は商人の由来で、第九紙ほぼ中央部六行目から書き始められている。第二部との間は、二行文ほど空いている。

第三部の前半は、一種の熊野本地譚と言える。天竺摩迦陀国の大王が日本にやって来る時随伴した山伏達が、商人の濫觴であ

ると説く。家の由緒を述べんがために、本地譚をもつてきている。即ち、浅間・長明・古渡・布川の四人が、十六善神に乞うたのが編尺というもので、それ以来、負の荷縄として用いることになったと説く。仏法の縄ゆえ、はちすの縄とも称する。かれら四人が談合して大和国三輪に市を創したことなどが、続いて語られる。なり、体であった文が、このあたりから候体にとってかわる。以下、「熊野の権現の本地」の引用を試みる。清濁は本文通り、／印で改行を示し、便宜私に読点を施した。この一条が、「秤の本地」の中で最も長い説話である。

抑熊野のこんげんのほんぢをくわしくたつね／申に、たいたうけいたん国のぬしとむまれさせ／たまいて、よきくどくをなされ給ふによつて、ぶつ／しやうこくのしはうでんのふくにんにむまれさせ／たまいて、かいぎやうをきわめらるゝによつて、また／国の大わうに七度までむまれ、七度めに日本／にわたり給ふなり、二十八人のけんぞくたちをいん／そつし、三尺のほうを八角にけつりやかて是／をつゑになつく、こかねさねのはらまきおき、／つるぎを三つとりいだし、ゑん有所におちつけ／とて是をこくうになげたまへハ、あんのことく／きの国むろのかうりくりだぐちおとなせ河／のみななみ、神蔵におちつくなり、彼大わう／日本ゑとはせらるゝとき、日本のわうの御名／ハけんひぐわんねんみつのへ壬八月廿八日かのとのの日／とらの一てんに熊野、かみのくらゑつき給ふ也、其後つるぎをさま／御たつね給へ共さらにつる／ぎわ見へぬなり、然処ニ、からすがいつれて、彼／有所をおしゑ申也、一のけんハしんぐう、一のけん／ハなち、されハ一つのけんハほんぐう、されバ三つ／けんの三所におさめ、熊野、三じやごんげんと／あらわすなり、されハ其時山伏のすかたに／て、ときん・くゑまんだらのかきのす、かけ・たいさうこくしきのはゞき・八目のわらんす／はき、彼山をふみたち給ふ、されハ廿八人の同山／山伏となりて、いまにみねへいる事、熊野を／本山となづく也、されハ一人の同山ハ伊勢へおち／つく、又一人ハ伊賀へおちつく、又壱人ハつの国へ／おちつく、又一人ハやまとへおちつく、又壱人ハきの／国ゆらにと、まり、彼へんぢやくを十六ぜんぢん／にこいうけとり、おいのになわとして、しゆぢやう／さいどのために、十八度御めくり給ふなり、七度めに／ふだらくゑわたり給ふ時、浅間・長明・ふつと／ぬの四人して、此へんぢやくをこいとりもとされ候／ぶつほうのなわなればとて、はちのすのなわ

と／つけらるゝ、さてハ熊野、ごんげんと同山／申たるものなれハ、あさふ殿ハ伊勢のしん／がになられ候也、然而後はかり事をもつて四人してだんかうなされ、市といふ物をたてたきとて、やまとの国みわのさとしゆくをわり、彼はちすのなわを六尺のほうのらうにかけ、四方へむかつて止られ候へハ、たくさんに人人まいり／候へ共、さうにいだすべきしやうはい物はなく候／さりながら伊勢の国よりきつた殿のくし／といふものをつげにてひき、同はんちやくより／こさいと申人はりを□候、はりかはふつと殿／うられ候、又くしおばあさま殿うられ候、其時／みわの市をたて候事、げんひ十二年二月／九月^{みつのと}のひつじ也、新市をたてはちむる時、又うりはじめたる物、又かう事、あさまとの／くしおは十せんに、長明殿市人に貳十疋に／うられ候／ぬの川殿はりを十せんにふつと殿に／うられ候、又ふつと殿市人に二十疋にうられ候、是／に付而、新市をたて候時、あき人のおやかたくし／はり・はかり、ちとうゑもつて参也、又ちとうよりハ／明神の御前に、かふと・太刀・かたなおかるゝなり／又あき人きたの方のおの／御かくをはじめ／其上だんかゝりにおよび、白木の弓七丁ぬの／十二たん代十貫、あき人のこかたたち是を／つないて、住吉の御前に置也、あき人のおやかた／こわうぢんのへい一本きり、一もんじへんばい／ちらし、へんばい何もふみ、其後太夫にのつとを／もうさせ、まくをうたせ、又はんにやをよませ／申、急度御ふせを申なり、其後あき人のこかた／たちに、住吉の御前におきせにを十疋もつて／まいりたり、ものには十銭さしにつないでくるゝ也／是ニ付而さしのくちといふ也（口絵写真参照）

続く一条も引用してみよう。

一 市たちあかりて後、はりを百本も二百本も／馬「」のくらつほにおき、四方へまくなり、是おかわらの者ひろうてとなり、然而後あきない物／いるゝ物なきとて、まくをたほして、ゆたんにぬい、四／人にてもちもつされ候、是ニ付而ゆたんおは下に／おく事も有、さて又れんちやくを下に置事なし

以下、三十数ヶ条にわたり、紀州由良の興国寺の開山に纏わる由来とか、人の荷物——たとえ兄弟のものであっても——に手をつけてはならぬとか、山伏と出会った時の礼のしかたとか、地頭の前へ出る折の作法とか、常に新しいわらんずを携えているのは市が立った時それを履いて市を通るためであるとか、逢坂・念珠・とがせ・清見ヶ関を四関とするとか、商人及び市に関わるさまざまな耳新しいことどもが記されていて、いたく興が惹かれる。狂言に「連尺」があり（『狂言集成』所収）、謡曲「安宅」にはつくり山伏ということばが冒頭富樫の（名ノリ）に出てくるが、「秤の本地」から窺い知ることのできるような、詳細な叙述はもちろん見られない。殊に、新たに市を立てるに際して、大和国三輪明神の庭の土を敷くことだの、ゑびすは十月廿日に誕生し正月廿日に嶋から我が朝へ下り給うたによって廿日ごとに講を催すとか、この講に商人は外れてはならぬとか、市の背景に宗教的な掟が控えていることを明示する条目は、見のがすことができない。次に引用する最後の二ヶ条も、鏡磨ぎに纏わる中国の著名な説話の使い方、また紺搔と戸隠権現との因縁を示していて興深い。

一 か、みとぎのいたの事、たいとうに、はくほと申て、ことのひきてなり、しきと申てことのき、て也、彼しき、か、みをふところに入、ことをきく也、其後、しき□也、さて又はくほ、ことのき、てなきとて、ことをわつて火^ゑくべる也、其時、とうしゆかう、ことのわれをとりあけ、彼しきかか、みをことのわれの上^三置けれハ、くもりしか、みきらりとほる、其後、か、みのいたハ是よりもはしまるなり

一 かうかきのかたいたわ、とかくしのごんげん、あまのいわ戸をかたとひらひらき給ふ時、ちふくのいた一枚はなれしを、ぜんわう御とりあけ、かたいたにヒ成、也

本作を御伽草子と見なす理由の一ツは、先にも述べたごとく、長短さまぐの説話が採り入れられている点にある。最初に引用されている、尸毗大王が慈悲深かったという、釈迦の前生譚に就いても、記しておかねばなるまい。

「秤の本地」では、しゆび大王の心をためさんがために、鳩と鷹とに変じたのは普賢と八幡ということになっている。しかし、これは当時享受されていた原話の翻案と考えられ、もとは、尸毗王が心を試みようとするのは、毗首羯磨天と帝釈とである。我

が国では、『三宝絵詞』に見られるものが最も古いものであろう。

『三宝絵詞』の総序・上序に続く「檀波羅蜜」から引用してみよう。

——むかし国王いましき。尸毗王と云ひき。慈悲の心深くして衆生を見ること子のごとし。帝釈その心を試みむと思ひて毗首羯磨天に語らひて云はく、「なんぢは鳩になりて逃げて王の懷に入れ。われは鷹になりて追ひて王の心を試みむ」と云ひて、おのおのなりぬ。鳩来りて王の脇に入る。鷹追ひて前の樹にゐぬ。「われに鳩を返したまへ」と乞ふ。王の云はく、「われ衆生を救はむと思ふ誓ひあり。返すべからず」と云ふ。鷹の云はく、「われも衆生にはあらずやは。などか憐ばずして今日の食物をば奪ひたまふ」と云ふ。王鳩の命をば救はむと思ふ。鷹の飢ゑをも助けむと思ひて、刀を取りてみずからの股の肉を割くに、鷹の云はく、「鳩の重さと等しくしてえむ」と云ふ。王斤^{はかり}をもちてかくるに、鳩の身はいよいよ重く、王の肉はいよいよ軽し。また二つの股の肉を取りて加ふるに、なほ軽し。また二つの肘^{ひぢ}、背中すべて一身ながらの肉をみな取りつるになほ軽し。鷹の云はく、「肉は皆尽きぬめるに、鳩なほ重し。またはいづくの肉をか加へむ。はやく鳩を返してよ」と責む。王の云はく、「さらに返すべからず」と云ひて、わが身ながら斤にかけむとするとときに、筋絶え、力尽きてまろび倒れぬ。みづからわが心を責めて云はく、「この苦しびははなはだ少なし。地獄の苦しびにはかりもなし。わが今悟あるだにもなほこのことを愁へば、地獄の人の悟もなきはましてその苦しびをいかにすらむ。われみづから誓を發して衆生を救はむと思ひにき。なにによりてかくばかりのことに痛みを迷ひて心弱くまろび落つるぞと。人來りてわれを助けておしあげよ」と云ひて、また起き上がりぬ。手をもちて斤の緒にすがりて、力を發して、しひて登りたまふに、その心定まりて悔ゆる思ひなし。ときに大地六種^{むくさ}に動き空の上より花をあめふる。大海に浪あがり、枯れたる木に花咲きぬ。——

(現代思潮社、古典文庫『三宝絵詞』、昭57)

このあと、天人が尸毗王を菩薩と讃え、「かならず早く仏になりなむ」と言い、鳩は鷹にはやく天の力をもって菩薩の身たる王の疵を癒^いそうと語り合う。鷹は帝釈と現じ、苦しいであろうのに悔いる心があるかを尋ね、「深く喜ぶ心のみあり。さらに悔ゆる

思ひなし」と王は答え、証をとどめんがためにもとのごとく本腹させよと希み、帝釈は忉利天の薬を注いで王の身の肉はもと通りとなった。自分の命を惜しまずに与える、これを布施の完成の極致——檀波羅蜜とするのである。この釈迦の前生譚は、『六度集経』・『智度論』等に記されている。

「絵あり」の一句で記し了えられた尸毗王の説話は、典型的な仏教説話の一つと言いつべく、そのことは、「秤の本地」を書き記した人も「六波羅蜜」の行の一つの捨身行としているから、それは心得ていたろう。帝釈と毗首羯磨天（帝釈の臣、建築を司るといふ）とが八幡神と普賢菩薩とにすり替えられてしまった理由はわからない。また、大王が詠じた「是やこの——」の和歌も、他の文献からは検出することができずにいるが、右の釈迦の前生譚は、仏教説話として、『宝物集』にも見えている。

三卷本『宝物集』下（古典文庫77、吉田幸一氏校、昭28）に、『法花経』の「国域妻子、頭目髓腦、身肉手足、不惜身命」の文の註として、「——さればじひ大わうはとはにかはりて、御みづからのし、むらをたかにあたへ、さつたわうしは、うへたるとらに我身をほどこし、せつせんでうじは、むじやうのものに命をかへ、しやりほつそんじやは、まなこをぬきて、こつげんばらもんにとらせ絵ふ」とあり、『私聚百因縁集』二の四「釈尊出家発心事」（古典文庫267、影印本、昭44）にも、「余尸毘大王トシテサレバ 鵠ノ秤ニ身ヲ懸ケ、薩埵王子トシテハ、飢タル虎ニ身ヲ投グ——」と見えている。「ラーマーマヤナ」とともにインド二大叙事詩の一つたる「マハーバータラ」に、尸毗王をウシーナラ国の王子として説いており、鵠ハトは火神、鷹を帝釈の変化とする（『仏教大辞典』四、大5）。また、『日本国見在書目録』に記載されている、宋法顕『仏国記』には、宿呵多国に尸毗王の遺跡があり、王が建てた塔はインド四大塔の随一と記す（同書）。

釈迦の前生譚たる尸毗王の説話は、この他『賢愚経』・『菩薩本行経』にも出ているが、『三宝絵』と同材の仏教説話が、この「秤の本地」にも採り入れられていることの意義は大きい。

さらに、全文を引用した、第二節の「熊野の権現の本地」は、前生が唐契丹国の主であつたが、仏生国（天竺）「しはうでん」

の福人^{ふくにん}と生まれ戒行を極め、天竺摩伽陀国の大王に七度まで生まれかわり、七度目に二十八人の眷属たちを引率して日本へ渡つて来たという語りはじめで、熊野神の由緒ではなく、大王も五衰殿女御もちけん、聖も善哉王も登場してこない。外国のなみでない人物が、日本にやって来て迹を垂れたというだけで、垂迹の理由も人間であつた時の受苦も語られてはいない。物語の筋だけを辿ると、唐突この上もないが、おそらく、熊野信仰と商人とは山伏を介して繋がりがあつたのであろう。勿論、商人一般ではない。商人の或る系統は、熊野神の末裔として我が系図に採り込み、神の由緒を語り続けてきた、そういう歴史が近世に及ぶまで存したものであつたろう。さきに引いた第三節の条々、市場と三輪の神また多びす殿や戸隠権現などが、紺搔・鏡磨の諸職と関わる記述からも、それは推測することができよう。仏教説話に限らず、かの祇園会の作り物にも造型化されている琴割山の由緒——研究者の中には、いち早く断絃説話・断琴説話なることばを用いはじめているむきもある——と重なってくる大唐のはくほとしきとの説話、『和漢朗詠集』の註にも出てくる話柄が見られるのも、本作が有する特色の一つであると言えよう。

不敏にして中世における秤座のことで関知するものは何一つないが、「職人歌合」にも「秤売り」は登場してこないのであるが、幸いなことに、『守随家秤座文書』なるまたとない文献資料がある。△註8▽ 林英夫・浅見恵両氏の労作たるこの文書は、「守随家文書」(文政九年から文政六年に到る)・「守随秤座記」(天正十四年から慶応三年に到る)及び「名古屋守随家史料」(元文二年から明治八年に到る)とから成る。日本の衡制の史料として、竹越与三郎氏『日本経済史』のみがかつてこの一部を使用したにすぎないと言われる。

江戸秤座の守随家は、初代が吉川守随、甲府の出身で駿河の今川氏に仕え、その縁により後に徳川家康(当時竹千代)に奉公し、甲府に帰住してからは秤細工人を抱えて秤所を営み、天正二年に武田氏から諸役免許の特権を与えられた。天正十八年以後江戸に移住、この年に関八州の衡制を管掌するようになったものとされている(同書解説)。この文書には、初代から十五代に到るまでの系図をはじめ、由緒書や願書・届書・證文・諸書留・諸事留などが収められており、例えば「熨斗目着用願書」(守随家文書、万延元年写)などは、「秤の本地」の一条とも関わるものであろうが、中世における秤座のことには殆んど触れるところ

がないようである。まして、心得や故事因縁を物語風に編んだ〈一卷の書〉は見られない。思うに、守随家ゆかりの、あるいは、それ以前の秤座の事情を窺わせるものが、史料として「秤の本地」には織り込まれているのではあるまいか。浅間・長明・古渡・布川の四家の由緒がまさにそれに相当するものではあるまいか。「守随家文書」は、「出張所」の項で「甲州上野原・奥州三カ国・駿河・会津・遠州中泉・勢州津」の六所を挙げるが、「秤の本地」の本文と一筆と目される奥書に記された人名と地名とは、正しく「長明翁」——長明家の末裔が書き写したものであり、「信州小縣郡白鳥庄海野」には、長明氏が居住していたのではあるまいか。なお、長明家と守随家との関わりについて不明の点があるが、なんらかの交渉の存したことが考えられよう。

浅間・長明・古渡・布川の四人が大和国三輪に市を創始したと語る一条も、やはり付会であろうか。既に知られているもので、市の創始にまつわる説話が二ツある。一ツは『庭訓往来抄』が説く聖徳太子創始説〈註9〉、いま一ツは『住吉松葉大記』など住吉神社関係の文献が説く神功皇后創始説である。〈註10〉

仏教説話以外でも、〈鞭の縁起〉とでも呼ぶべき、さながら我が国の「剣之巻」を思わせる構想の痛快なる説話も採り入れられており、これも珍しいもので、御伽草子絵巻の『張良』や、一連の兵法書——『六韜』や『三略』の註釈類——また『和漢朗詠集』の註などでも、私は読んだことがない。

「秤の本地」の本文は、仮名遣いの誤りや言葉遣いのあやしげなところも少なからず認められ、文意のとり難いところもあるが、室町末期の写とおぼしき正しく原本であり、然るべき伝承に基づいて拵えられた中世諸職の一ツ、秤を用いる商人のやや古風なる由緒書として珍重すべきものと考えてよからう。更に詳しく、中世商人の実態、長命家の追究、山伏と商人との交渉、市場の背景と諸社の縁起、絵画資料の探索また同趣の諸職の始源にまつわる縁起・因縁のたぐいを博搜しなければなるまい。

註1 『色葉字類抄』（中田祝夫・峯岸明両氏編『色素字類抄 研究並びに総合索引 索引篇』、昭52）に、「秤」を「俗作秤」と註し、「斤」「格」「権」などをも載せる。『塵添瑤囊鈔』五・四十四の「秤事」に、「秤」「稱」「權衡」の字に註を加え、『節用集 桐園本』上（天理図書館善本叢

書21、昭49)に「秤子・権」、『節用集^{易林本}』に「權衡」(同書)、『増刊下學集』(天理図書館善本業書59、昭58)に「秤子」、『節用集^{天正十七年本}』(同書)・龍門文庫本『節用集』(龍門文庫善本業刊7)に「秤子・権」、『運歩色葉集』(元龜二年写、京都大学図書館蔵本、京都大学文学部国語国文学研究室編、昭44)に「秤」と見えている。

2 『節用集^{根園本}』に「縁起^{エンギ}最初因縁」、『増刊下學集』に「縁起^{エンギ}最初因縁」と見えている。もとは仏教用語であろう。

3 「商人」の訓みは幾通りかある。アキント(『根園本』節用集)・龍門文庫本『節用集』・アキヒト(『易林本』節用集)・天文十九年写『節用集』、アキンド(『増刊下學集』・『天正十七年本』節用集)・アキヒト(『運歩色葉集』)。

4 『東北院職人歌合』には、五番本と十二番本とが存する。前者は曼殊院本と称され、東京国立博物館蔵、複製がある。後者は群書類従に翻刻がある。

5 『田植草紙』(日本古典文学大系44『中世近世歌謡集』晩哥一番、へあき人をこゆるかやせんたひつをこゆるか せんたひつの中のはなむらさきをこゆるよ ひつの中なるはしやうのものかたひら まよふたはなむらさきのいろにわ きせいていとよりかけのかたひら。

6 説経『をぐり』の冒頭部に、小栗判官と商人^{あき}後藤左衛門との興味深いやりとりがある。紙・板の物・紅・白粉・畳紙・沈・麝香・三種・蠟茶など千駄櫃に入れて売り歩く左衛門は、日本に三人居る後藤姓の者で、高麗・唐へ二度渡り、日本は「旅三度巡つた」商人である。『吾妻鏡』に、後藤左衛門尉の名が見えている。

7 弥陀次郎の名に注目すべきであろう。『狂言不審紙』所収「悪太郎」の項に、山城淀東一口の漁人悪次郎のことを記し、「河原巻物」にもこれが職人の名として記されている。

8 図書館調査室磯貝幸彦氏の教示により、『守随家秤座文書』の存在を知った。これによって、「秤の本地」が単なる虚誕にあらざることを知り得た。なお、同書が写真版で載せている「秤改のとき使用した背おい櫃(高さ72cm・横31cm・28cm)」とある二面は、紛うかたなき千駄櫃であろう。群書類従系・曼殊院本系ともに「商人」の背に負われた千駄櫃の絵が画かれている。

9 『庭訓往来抄』「市町之興業ト云事」の条に、天竺・善覚長者、大唐・禹風、我朝・聖徳太子がそれぐ市^{たみし}の起りであると説く。この抄の中でも最も長文の註をなし、大唐の例は謡曲「猩々」の本説と深く関わり、我が朝の例は、大和国三輪の郷に太子が市を立てたことを詳しく述べている。「六濟」に市を立てるのは大唐を軌を一ツにし、聖徳太子と「西ノ宮ノ御神(夷三郎殿)」との因縁を説いているのも、「秤の本地」の記述と符合する。

四 「呉越」絵巻三軸

中世の説話文学を研究する者にとって、「呉越の戦」ということは、耳にも眼にも親しいものである。軍記物語にいろいろ見えている。「呉越同舟」という諺があり、『譬喩盡』には「呉越と隔つ」を『戦国策』から引き、「中惡謂也」と註を加えている。四・五年前の夏のことであつたか、東京のさる古書肆の目録に『史漢物語』なる大型写本が載つた。△註1▽慶長書写のもので、目録の部分が写真版で載っており、そこには、二段三十二行にわたり、題目が掲げてあり、どうやら中国の歴史を説話的に描いた書であるらしく思われた。当然、呉・越の争いなども採りあげていたものと考えられよう。『史漢物語』という書名も、御伽草子の研究者には周知のものである。即ち、『看聞日記』永享六年十一月六日条に「——内裏物語御用之由被仰下之間、史漢物語六卷、武蔵坊弁慶物語二卷獻之」とあつて、伏見宮貞成親王の許に、内容は不明ながら、御伽草子風のもの——当時のことばで言うなら、貞成親王の日記の紙背に見るごとく物語——の「一ツ『史漢物語』が存したらしい。この本は直ちに売れてしまったが、珍しい本が出たと私が騒いだら、いや、それは『看聞日記』に出てくる『史漢物語』と別のものである可能性もあると、若い友人にたしなめられた。もし、慶長写本が、伏見宮家にあつた六卷本系の転写本であつたならば、後崇光院もこのような書物を通して、「呉越の戦」の説話に接しておられたのだろう、そう空想を馳せるのは愉しいことだ。

『呉越』は三軸の絵巻で、寛文期前後の製作と思われる。念のため、家永三郎氏編「絵巻物文献目録」△註2▽の「(コ)部」に当たってみたが、この名は掲げてない。松本隆信氏編「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」には、「呉越」の項に、「A、赤木・光慶図書館旧蔵奈良絵本の影写本 半二帖、B、スペンサー、絵巻 大五軸」とあり、前者は『室町時代物語大成』四(昭51)に翻刻されている旨、示されている。スペンサー本は、昭和五十三年度奈良絵本国際研究会議の折、私も一見した筈であるが、全く記憶に止まっていない。ほんの一部分マイクロフィルムに撮ってもらったが、その資料も、探しあぐねている。松本氏も二

ニューヨークの市立図書館で同じ時に披見され、AとBとに分けておられるのであるから、おそらく、別系統の本文なのでと察せられる。

Aの奈良絵本からの影写本は、本学図書館蔵本『呉越』と殆ど同じ詞章を有する。したがって、絵巻『呉越』が、とりたてて新資料として価値を持つということではない。製作時期の先後、詞章相互間の影響関係なども、明らかにはなし難い。しかしながら、たった二本ではあるが、校異を示すことによって、御伽草子と一口に呼ばれている一群の作品の中で、江戸の初期から中期にかけて、書写され製作された絵草子や絵巻の、その製作過程の実態を探るには、好個の話題を提供するのではあるまいか。一つには、御伽草子の典拠とか原典とか称すべきものが存在することも、更に広汎に話題をひろげることとなる。それに先だって、まず書誌を示し、その後、対校したものを表で示してみたいと思う。『ごゑつ』との重複を避けて、全文を載せることは控える。

表紙 濃緑地金欄 柘榴樹文様 縦凡三三・二糎 横凡二六・二糎。表紙左肩上題簽 縦凡一六・三糎 横凡三・五糎。「呉越上(中・下)」。見返 一面に金箔を押す。軸 象牙。

紫の打紐。本文料紙には、金泥にて、波・草花また霞などを下絵に画く。

上巻 詞全六段 絵全五図。中巻 詞六段 絵七図。下巻 詞六段 絵六図。下巻のみ詞ではなく絵で終っている。いずれも画面の上・下を霞で直線に区切り、金箔を多く施し、その中間に絵が画かれている。普通このものを奈良絵巻と呼んで誰も怪しまないが、正確に言うならば、土佐派の絵巻とか土佐絵巻と言うべきであろう。霞と霞との間に画かれている絵は、奈良絵とは明らかに一線を画する画風である。

次に、紙幅の寸法と画面の説明とを記す。

『呉越』上

第一紙 凡四八・一糎

第二紙 四八・八糎

第三紙 九四・五糎〔絵 第一図〕越ノ国ノ宮殿。奥ニ越王勾踐、左右ニ延臣タチ、廊ニモ延臣タチ。庭ニ池、松ノ樹ナド。門外、馬ヨリハンレイ范蠡下リントスルトコロ、家臣兩人ナド。

第四紙 四九・〇糎

第五紙 四八・六糎

第六紙 四八・七糎

第七紙 四九・二糎

第八紙 五〇・二糎〔絵 第二図〕呉ノ国ノ宮殿ノ一室。呉王夫差、廊ニ甲冑ヲ帶セシ延臣タチ。庭上ニモ甲冑姿ノ延臣タチ。

第九紙 四九・三糎

第十紙 四八・七糎

第十一紙 四八・五糎

第十二紙 四九・一糎

第十三紙 九四・〇糎〔絵 第三図〕越ノ兵ト呉ノ兵ト戦ウトコロ。多クハ騎馬。水ノホトリ。

第十四紙 四九・七糎

第十五紙 四九・一糎

第十六紙 四八・四糎

第十七紙 四八・六糎

第十八紙 四九・八糎〔絵 第四図〕越王ニ諫言スルタイフシヨウ大夫種。傍ニ太子。勾踐ト太子トハ敷皮ニ坐ス、皆武装。軍臣タチ五名。

川ノホトリ。

第十九紙 四八・六糎

第二十紙 四九・〇糎

第二十一紙 二三・五糎

第二十二紙 五〇・二糎〔繪 第五図〕呉ノ国ノ宮殿ノ一室。呉王夫差ニ言上スル大夫種。延臣タチ、廊ニモ五名ノ延臣タチ。

第二十三紙 四八・五糎

第二十四紙 四八・八糎

第二十五紙 二四・四糎

『呉越』中

第一紙 凡四八・八糎

第二紙 二三・四糎

第三紙 五〇・六〔繪 第一図〕呉国ノ宮殿。奥ニ夫差、前ニ拝跪スル大宰タイサイヒ。越王勾踐、群臣タチ。

第四紙 四八・八糎

第五紙 四九・六糎

第六紙 五〇・一糎〔繪 第二図〕呉国。牢獄ノ前、格子ノ向コウニ坐セル勾踐。庭ニ警固ノ官人四名。池ノホトリニ魚売り

（実ハ范蠡）ノ立チ姿。松ノ樹。

第七紙 四八・二糎

第八紙 四八・六糎

第九紙 四八・八糎

第十紙 五〇・二糎〔繪 第三図〕呉王ノ寢所。床ニ臥セル夫差。枕許ニ勾踐、近クニ延臣五名。椽ノ向コウニ池。

第十一紙 四八・八糎

第十二紙 二三・四糎

41 「秤の本地」他解題

第十三紙 五〇・八匁〔絵 第四図〕路上。車ニ載セラレ越ノ国へ還ル勾踐。侍臣・供ノ者ナド十人余。池中ヨリ蛙十数匹、路ニ現ワレシトコロ。

第十四紙 四八・四匁

第十五紙 四九・〇匁

第十六紙 五〇・六匁〔絵 第五図〕越ノ国ノ宮殿。中央ニ勾踐、並ミ居ル文武百官、宴ノ態。

第十七紙 四八・三匁

第十八紙 四八・八匁

第十九紙 二四・〇匁

第二十紙 五〇・一匁〔絵 第六図〕越ノ国ノ玉殿ノ一室。椅子ニテ対イ合ウ勾踐ト后・西施。侍ナド。

第二十一紙 四八・七匁

第二十二紙 四八・七匁

第二十三紙 四八・〇匁

第二十四紙 四八・五匁

第二十五紙 二一・一匁

第二十六紙 五〇・〇匁〔絵 第七図〕呉ノ国ノ玉殿ノ一室。夫差ト西施。侍女タチ。

第二十七紙 四八・四匁

第二十八紙 二六・五匁

『呉越』下

第一紙 凡四九・〇匁

第二紙 二三・六匁

第三紙 五〇・三糶〔絵 第一図〕呉ノ国ニテ、范蠡、太刀ヲ買イ求メシ者ノ家ヲ訪レシトコロ。男ノ傍ニソノ妻ト子。庭ニ池、岩組、松ノ樹。

第四紙 四八・三糶

第五紙 四八・七糶

第六紙 四九・一糶

第七紙 三一・六糶

第八紙 五〇・五糶〔絵 第二図〕呉国、南殿ノ玉座ニ倚ル呉王夫差。廊ニ六名ノ延臣タチ。庭上ニ縛メラレシカノ男。伴イ

来タル家臣三名。

第九紙 四八・五糶

第十紙 二三・八糶

第十一紙 五〇・八糶〔絵 第三図〕越ノ軍勢、大挙呉国へ攻メ向カウトコロ。騎馬六、軍兵大勢、川ノホトリ。

第十二紙 四八・七糶

第十三紙 五〇・五糶

第十四紙 九四・五糶〔絵 第四図〕越ノ軍勢ト呉ノ軍勢ト相戦ウトコロ。

第十五紙 四八・七糶

第十六紙 四八・七糶

第十七紙 二四・〇糶

第十八紙 五〇・二糶〔絵 第五図〕呉王夫差捕ワレ、呉ノ王宮ヲ馬ニテ袖ヲカズキ顔ヲ覆イ隠スヨウニシテ出ズルトコロ。

門ノ上高ク伍子胥ノ首。越ノ国ノ軍兵三騎、従臣タチ。

第十九紙 四八・三糶

43 「秤の本地」他解題

頁段行	
(A)ごゑつ 奈良絵本二冊	<div>568 上 1</div> <div>かけては</div> <div>をたやかならす</div> <div>世には</div> <div>文を</div> <div>なとかは</div> <div>國民</div> <div>國ある</div> <div>あかせんと</div> <div>のみならず</div>
(B)呉 越 絵巻三軸	<div>かけば</div> <div>おだやかならす</div> <div>代には</div> <div>ぶんを</div> <div>なとか</div> <div>國たみ</div> <div>国あり</div> <div>あはせんと</div> <div>のみにあらず</div>

第二十紙 二二・二糧

第二十一紙 五〇・一糧〔絵 第六図〕越王勾踐ノ玉殿ノ中。勾踐、大勢ノ延臣タチ。(止)

中・下巻の表紙・見返しはともに凡二六・〇糧、本文が終ったあと、凡十糧の余白がある。

次の対校表は、上段に『ごゑつ』（『室町時代物語大成』五所収）、下段に『呉越』（本学図書館蔵本）を示す。三桁の数字は、前者に拠るもので、頁数を示し、「上・下」は同書の上段・下段を示し、1～18までの数字は、各段の行数を示す。なお、『ごゑつ』には読点を付し改行があるが、次の表ではそれらを見捨ててある。挿絵に関する註記は、そのまま踏襲した。

15	13	13	8	4	下 3	17	16	14	14	14	13	11	8	7	4	3	569 上 2	17
よるへからす	えつの	多少を	をよふまで	たまふへきにやと	うせうせんと	あらはし	その三つなり	とをうして	おもんはかり	ちゑふかうして	伍子書	其二つ	誠を	そのひとつ	ほろほし給はん事	やうを	かしこまつて	思ふなる
よらす	ゑつの	多小を	およふまで	絵ふへしと	こせうせむと	あらはす	その三なり	とををして	もんはかり	ちゑふかふして	ごししよ	そのふたつなり	ときを	そのひとつなり	ほろほさん事	事のしたいを	(ナシ)	おもふなり
																	〔挿絵 第一図欠〕	
																		〔絵 第一図〕

45 「秤の本地」他解題

12	9	7	7	5	5	5	4	3	2	下 1	18	7	5	4	570 上 2	18	17	16
いんそつして	時に	國中に	ゆやすへからすとて	なんそえき	くゆるとも	せられなは	もれきこえ	兵	なんちか	我をいさむる是せいはつを	いつれかさき	又	しらさらん	せうれつを	いさむること	とれること	にをよふ	にあり
そつして	(ナシ)	國中を	やむましとて	ゑき	くやむとも	せられは	きこえ	つはもの	これなんちか	われせいはつを	いつれかさきたち	もし	しれり	せうふを	いさむるそや	かはれる	におよふ	による
〔絵 第二図〕																		

8	7	6	5	5	5	4	4	3	3	2	2	571 上 2	17	17	17	17	17	16	15
ことなるに	打いれさせ	あひしたかへ	あなとりて	おもふに小勢なり	み給ひて	所々	過し	わつか	見給ふに	呉の兵	勢	越王	かくしてそ	残る十七万きをは	わつか三万よき	てきを	大勢をひかへ	大山	くわいけい山

くわいけいさん
大さん
大せいむかふわさと
わきとてきを
(ナシ)
十七万きを
ふかくかくしてそ
越王は
せい
呉國のつはもの
みたまへは
わつかに
すきし
ところく
御らんして
おもふにもにぬ小勢なりけり
あなとりければ
したかへ
うちいれさせて
事なれば

47 「秤の本地」他解題

10	9	9	8	8	7	5	5	5	4	3	下 1		15	12	10	9	9	8
馬のいきもきるゝほとにそ	せんこを	ひとつに	したいのちんを	かけにくるを	これによつて	かくしをきし	ひきしりそき	くわい山へ	すてふち	一いくさのせうふをせて	うたんとかねてこしたること	〔挿絵 第二図欠〕	はかりしこと	つゝみをうつて	なへんて	引にをよはす	つゝなる	余寒も
馬のきるゝほとにそ	さうをも	一ちんに	たいのちんを	かけてにくるを	(ナシ)	(ナシ)	ひきこもり	くわいけいさんへ	すてふちを	一いくさもせて	うたんといかりし事		たくみし事	つゝみうつて	なつむて	ひく事もかなはす	つらなり	のこるきむさも

8	8	6	4	4	4	3	3	2	1	1	572 上 1	17	17	15	14	14	12	11	10
つよきをやふる事	かたきをくたき	つかれたるうへ	さゝへたり	かたき	かゝらん	又うしろなるてきに	いかけたり	はらはんと	まへなるてきを	うつてかゝるあひた	かゝりける所に	ひかへたり	馬をかけよせ	つはものは	せめかけたる	あさましと	おひいれ	すてに日は青山に	おつかける

ときをくたく事	かたきをやふり	つかれたり	(ナシ)	かたきは	はらはん	ひきかへしてうしろなるてきを	まちかけたり	かゝらんと	まへなるかたきに	うつてかゝれはすゝむて	(ナシ)	ゐたりしか	馬をよせてひかへ	つはもの	せめたゝかふ	もらさしと	をひきいれて	日すてにせいさんに	おふたりけれ
---------	---------	-------	------	------	------	----------------	--------	-------	----------	-------------	------	-------	----------	------	--------	-------	--------	-----------	--------

49 「秤の本地」他解題

15	12	11	10	8	7	7	6	6	6	4	4		2	下 2	17	17	15	11
われしそつと	けふつきて	まくのいり	のことし	あまたの勢のあらき手	くはゝりける	のかたにそ	つはものとも	となりの國の	つかさりし	りんこくのしよう	おはします所に		矢つき	手をおひ	せんこ	ひるみ給はす	かけまけて	くわくよくのちんをおひなひ
つはものと	けふにつきて	まくのうちにいり	のこつく	三万きにて	はせくはゝりければ	のかたに	つはもの	りん国の	つかさりつる	(ナシ)	ましますおりふし	(絵 第三図)	矢つきて	手をおふて	(ナシ)	こらへかねて	うちまけて	ともゑにおひめくらし

15	14	14	13	10	10	9	9	8	8	7	5	5	4	4	3	3	573 上 3	18	18
いて、	えつわうの	左將軍大夫種	ときにここに越の	おんあひを	三津の水の	うちしにせん	心やすく	さきとして	生前の	さきにたゝは	うきめを	死にをくれ	ようちのものなれは	よひいたし給ひて	おはしますを	したかひて	父越わう	やきすてんと	つみて
出て	ゑつわうの	さしやうくん大夫種 <small>たいふしゆ</small>	ときに越の	をんあいを	さんづのつゆの	うちしにして	こゝろやすくおもひきり	さきたて、	しやうせんの	さきたつは	うきなを	しにをくれ	ようちなれは	よひ出したてまつりて	おはしましけるを	したかつて	越王	やきすてむと	つむて

51 「秤の本地」他解題

16	15	15	15	12	11	11	11	8	8	8	7	7	5	4	下 3	18	16
もちぬ	かこまれさせ給ふことも	□てきに	りなくして	みしかくして	きゝをよひし	かたるに	呉王	けつきの	かれ	よくしれり	久しくそひて	太さひは	きよめんと	大軍をおこし	ふしやう	臣かはかりことをしんし給ひ	かたし
〔挿絵 第四図欠〕																	
もちひ	かこまれぬる事も	呉のかたきに	りなく	みしかく	きゝしか	かたるを	かの呉王	けつきの	これ	さつせしに	久しく	太宰 <small>たさい</small> 語 <small>ご</small> は	すゝかんと	大ぐんをこし	ふひむ	(ナシ)	かたく

14	14	13	11	7	7	5	2	下 2	18	17	16	14	9	9	9		5	3	574 上 1
かなひ侍らす	しよもう	そなへたてまつらん	たうほくの地となし	一ほ	下臣	くはん君せん	ことはをはさしをき	ほうゆうの	いまくを	ゐたり	いひて	えんもん	よろひをぬき	則	しかるに		ふくして	又	御ゆるしかうふらは

かなひはんへらす	しよまう	そなへ申へし	成二湯沐地一 <small>なしたうほくのちと</small>	一畝	しんか	寡君せん <small>くはん</small>	ことはをいたさす	ともの	いはくを	いたり	いふて	ゑんもん	よろこひをなし	すなはち	(ナシ)	(絵 第四図)	おれて	(ナシ)	ゆるされは
----------	------	--------	------------------------------------	----	-----	----------------------------	----------	-----	------	-----	-----	------	---------	------	------	---------	-----	------	-------

53 「秤の本地」他解題

15	15	15	13	8	5	下 1	16	15		10	8	7	4	4	3	575 上 1	18	15	15
まつたふして	後は	こうあつく	てつせき	申へし	いたす日より	臣	天より	こうせん		呉のちん	つみを	心よけにとけて	存命	みつからか	このことを	ほうおん	給ふ事	さいほうを	ころし給はんとならは
まつたうして	のちは	こうあつて	てつき	いふへし	いたす日	しんか	天の	とうせん	〔絵 第五図〕	呉王のちん	つみをは	とけて	そんめい	みつから	この事	ほうをん	むすふ事	さいほう	ころさんとならは

14	13	13	12	12	10	6	5	5	2	下 1	18	17	14		4	1	576 上 1
ひたさぬ袖もなし	なみたに	こそしやうに	二く	一えき	みえ給はすして	ししゆを	白馬素車に	本こく	とひて	せられければ	なかりける	かゝはれり	くわいけいさん		一ほの	呉をかさねて	とうしやく
														呉越 中			
														一畎の			
														かゝれり			
														なかりけり			
														せられは			
														といて			
														ほむこく			
														はらばそ 白馬素車につて			
														璽綬を			
														みえたまはす			
														一驛 <small>表き</small>			
														二驅 <small>く</small>			
														こそしやうへ			
														なみた			
														かゝらぬそてもなし			
〔絵 第一図〕																	

NII-Electronic Library Service

9	8	7	7	5	5	2	下 1	17	17	17	13	12	11	11	9	9	8	578 上 3	18
すなはち	くはん人に	いつのときをか	ほうせすむは	わすれかたきかうおんなり	君王のしひ	をおさへて	このよしを	せんきしけれども	左右の大臣	しらすへきやと尋るに	ましきあらず	申せとも	たつねさせ絵へは	れうちのことを	大りへきたりける	したかひて	かのいし	名いの	ちすれとも

(ナシ)	くはんに	いつれの日をか	ほうせすんは	めくみのかうをんなり	君王しひなる	を、さへて	是を	あひかへり見てこれを	左右の近臣	しらすへきをとふに	ましきにあらず	いへとも	とはせたまへは	れうちのしゆつを	てんに来る	したかつて	かのゐし	めいるの	治 ^ち
------	------	---------	--------	------------	--------	-------	----	------------	-------	-----------	---------	------	---------	----------	-------	-------	------	------	----------------

57 「秤の本地」他解題

10	10	9	8	8	7	6	5	4		1	579 上 1	18	17	17	9
といひけるものを	臣下に	せんしありけるに	本國へ	國に	のみならず	むくいさらんや	そのおんを	人心あつく	ごゑつ 下	よろこひよそほひは	女くはん	かへされける	大官をさつけ	ゆるし下され	このよしをうつたへければいそき呉わうへ申さんと思はれけれ共まつくひそかにいしにかたたる、
と申もの	しんか	せんけせられける	本国に	国を	のみにあらず	ほうするこゝろなからんや	其をんを	あつて	〔絵 第三図〕	そのよそほひ	ちよかん	おくらせ給ふ	大くはんをあたへ	くたされ	このむねそうもん申ければくきやう呉王に
															はしらせたてまつらてひそかに醫師にしらせらる、

17	17	16	15	13	4	580 上 1	18	18	17	15	14	13	12	11		4	下 2	12	11
たとへんかた	梨花	きえたり	をろそかにして	いらせ給ふ	ならひに	かへる	えたに	ふくろうは	故宫	これよりはしまれり	なへたる	その雪をとりて	大雪のふりたりけるを	さへかへる	〔挿絵 第六図欠〕	かいつ	越わう	かくと	あたふるものを

たとへむかた	梨花 ^{りはな}	きえたる	をろそか	かへりまいりたまふ	ならひ	かくる	ゑたに	ふくろう	すみこし古宮	これなるへし	なめたる	とりて	雪いとしろふふれりけるを	さえかへる	〔絵 第四図〕	かはつ	越	うくと	あたふるを
--------	-------------------	------	------	-----------	-----	-----	-----	------	--------	--------	------	-----	--------------	-------	---------	-----	---	-----	-------

たまひける　はんれいなみたをなかし申けるはまことにきみてん／＼のおもひをはかるにしんかなしまさるにあらすといへともしいませいしをおしみたまは、呉越のいくさふた、ひやふれてこわうまたつはものをはつすへし　さるほとならは越の国を呉にあはせらるゝのみにあらすせいしもろともにうはるへし　しやしよくもうは、れなん　われつら／＼事のていをはかるに呉王いんをこのみいろにまよふことはなはたしせいし呉の後宮に入給ふほとならは呉わうこれにまよひてまつりことをうしなはん事うたかふところにあらず　国ついへたみそむかんときにをよんてつはものおこし呉をせめらるればかつことをたちところにゑつべし　これしそんはんせんにおよんてふじんれんりの御ちきり久しかるへきみちとなるへしと一とはなけき一とはいさめてりをつくし申ければ越わうことはりにをれてせいしを呉国へそをくられけるこそまことに

61 「秤の本地」他解題

13	10	10	9	6	5	4	4	3	3	下 1	18	18	16	13	12	11	581 上 11
ともし火にむかふ	もよほし給はんため也き	興を	えんせし	ゆうえんを	まつりことをも	いんらんを	夜は	侍しより	君王	たちまちに雲間に月を	とらはして	えんとちて	えめは	そふかひもなき	そはたて、	床に	ほとんの雲
ともし火にかふ	もよほさんためなり	けうを	ゑんせじ	けうゑんを	まつりことを	いんらくを	よるは	はんべりしより	くんわう	まちに雲まふ月を	とらかして	ゑんとちて	ゑめは	そふかひなき	そはたて	ゆかに	ぼさんの雲
																	たくひなきわかれなり
																	〔絵 第六図〕

8	5	下 3	14	14	13	12	8	7	7	6	3	2	582 上 1	18	18	16	15	15	15
砥	もちる給はさりしかは	からけるなり	とふに	あやしきていを	のことし	からけたること	えひを	群臣を	えんせんために	きゝ入給はす	過たる	あひして	ほうし	ちうわうは	ゐんの	はんしえひて	いさめす	下	上

砥	もちひたまはさりしかは	あくるなり	とふ	あやしきゆへを	のことく	かゝけたる事	えひを	くんしんを	ゑんをせんために	きゝたまはす	すきたり	あいして	ぼうじ	ちうわう	いんの	ばんしゑひて	いさめせす	しも	かみ
---	-------------	-------	----	---------	------	--------	-----	-------	----------	--------	------	------	-----	------	-----	--------	-------	----	----

63 「秤の本地」他解題

583 上 1													
下 4													
<div>青蛇</div> <div>まへに</div> <div>そのもとゐを</div> <div>立たりける</div> <div>さかふときは</div> <div>ちうせんとのけしきあらはれ</div> <div>たり</div> <div>いたます</div> <div>法なり</div> <div>かゝりて</div> <div>うたれてしなんことは</div> <div>忠勤を</div> <div>すきすへからす</div> <div>呉國の</div> <div>をよひ給はん</div>													
<div>青蛇<small>せいしや</small></div> <div>御まへに</div> <div>そのもとひを</div> <div>たつたりける</div> <div>〔絵 第七図〕</div> <div>さかふとき</div> <div>ちうせんとす</div> <div>かなします</div> <div>のりなり</div> <div>かゝり</div> <div>てにしなん事は</div> <div>ぢうかんを</div> <div>すこすへからす</div> <div>呉の国の</div> <div>およひきたまはん</div>													
<div>呉越 下</div> <div>けんせすたゝ</div>													

11	9	8	8		4	4	584 上 4	15	12	10	8	8	7	7	7	5	5		4
しゅゑん	まつりこと	けん臣	よろしからす		ちこはやうへに	つま子をもてり	さふらへとも	この太刀のあたひを	こゝに	きゝけるか	ひそかに	やうを	呉こくへこえて	越のくにのはんれい	さるほとに	万人	くちをとちて	らにおもねつて有といへとも	ねいしんいよく君のかたは

しゅゑん	まつりことを	けんしん	よろしからさるか	〔絵 第一図〕	ちこあり かれはやうへに	つまをもてり	はんへれとも	此たちをあたひを	呉わうに	きゝたりける	(ナシ)	やうをも	呉国へわたり	はんれいは	かくて	まんにん	くちをつゝみて
------	--------	------	----------	---------	--------------	--------	--------	----------	------	--------	------	------	--------	-------	-----	------	---------

2	585 上 1	18	17	17	15	13	13	11	11	8	7	7	7	3	1	下 1	17	16
けん見なるへしとて	さま	是なる男のていをみるにいか	官人	をしへのことく	さるほとに	ちきにもゝの	それに	おつへからす	さためてやかて	ていをせは	そゝきて	かうふんにかきのせ	きん臣二十よ人を	かへりけり さて	侍り候はん	ことなれ	いふやうは	あたへん
けんみなるらんとて	これは	くわん	をしへのことくして	(ナシ)	もゝの	(ナシ)	あつへからす	さためてけいごのぶしあやしめてやかて	すかたをせは	そゝきてつくり	かうぶんをかき	きんしんを二十よにん	かへり	はんへらむ	事なり	いふ	うり給ひやと	あたへむ

5	5	3	2	2	2	下 1	18	13	12	9	9		7	7	6	5	4	3	
うへと心得てたかひに心をき	是のていを見て諸臣わか身の	のこる人く	廿よ人の	心を	群臣以下に	おとろき給ひて	れん判あるなり	つきてみ絵へは	ひそかに	ものなり	あゝくるしや	いきをつきて	きつと心得てしはし	かのおとこはやおちてよしと	せめたりければ	けしきもなかりけり	あてけれども	ちよくちやうなれは	手かせくひかせを
これをきゝていかなる事やらんとたかひに	のこる人ゝ	かの廿余人の	こゝろ	(ナシ)	あやしくおもひて	れんはんなり	たちてみたまへは	(ナシ)	ものなれ	(ナシ)	こゑをあけて	かのしふんよきとおもひて	せめければ	けしきなし	あてけるか	ちよくちやうなり	くひかせを		

67 「秤の本地」他解題

586 上															
6	5	4	3	2	1	16	15	13	12	11	10	9	10	9	
いきをもさせす	かひ	あるくに	此いくさ	なかりける	たゝかひを	つようして	つはものをより	くはくよくの	かねてより	むかはれける	勢を	さしむよし	そむひて	秦の國に呉を	あひようしんをしくちをとち てをのかありかへひきてきひ しく身のようしんするより外 のことはなし
きをもさせす	かい	あるくにも	このいくさを	なかりけり	たゝかひ	つよふして	(ナシ)	くわくよくの	もとより	おもむき給ふ	せいを	さしはさむよし	そむきて	しんの国呉に	もんこをとちてようしんきひしくしてこゝ ろをゆるす事なし

12	9	3	587 上 2	16	10	9	下 8	14	14	13	11	11	11	10	8	8
したかへ	百きはかりに成にける	た、かひをは	聞絵ひて	返し入参らせける	きひて	越わう御らんして	この火をそけしにける	みかたくたひれければしはし	さ、へける	大山の	やふれたりければ	呉わうか心にのつて	れは	せめたてられて引いろに成け	小勢	馬けふりを
したかへて	百きに成にけり	た、かひを	きひて	かへし入たてまつり	きいて	越王	この火をきへしけり	(ナシ)	さ、へたり	大さんの	をうちやふられて	呉王かつにのつて	すこしせめたてられたり	小せい	馬けふり	ひつそふて
〔絵 第三図〕																
〔絵 第四図〕																

69 「秤の本地」他解題

6	5	5	588 上 1	14	12	8	8		7	6	4	下 2	18	18	18	14	13	12
是にはちて	呉わうを見て	まなこ	呉の東門を	といひて	いちてうにして	あたへたる	いにしへ	らす	かうをきるにそののりとをか	申けるは	をよはす	きゝ給ひて	あつうして	れいき	ことはいやしうして	君に	立て	こそ山にとりのほり
これに	あひ見て	まなじり	呉わう東門を <small>とうもん</small>	といふて	てうにして	あたへたり	いにしへは		さるにからそののりすとをから 伐レ柄其規不レ遠	おかして申けるは	しのひす	きいて	あつうし	れいを	ことはをいやしうし	君わう	たてゝ	そさんにとりのほり

11	11	10	8	5	下 4	16	16	14	14	14	13	12	11		9	7	6
たまひける	栄花に	殿を	たくく	となれる	こうちんの	の給ふに	さつけん	なり給ひしかは	うちしたかへて	周を	呉國を	ちうせられ給ふ	官人		このありさまを	かしらを	おもてをさすかあはし給はす
たまひけり」	ゑいくわに	てんを	たえく	となれり	こうちんの	のたまふ	ゆつらん	なりしかは	たいらけて	しんを	呉王を	はねたてまつる	くわん	〔絵 第五図〕	これを	かうへを	おもてをあはする事をさすかはつかしくや おもはれけん

11	是を呉越の記をあらはしける (ナシ)
とかや」(止)	〔絵 第六図〕(止)

一見して明らかなことは、奈良絵本『ごゑつ』(以下、A本の略称を用いる)と絵巻『呉越』(以下、B本の略称を用いる)とが、頗る酷似する本文を有しているということであろう。清濁の有無、宛て字の多寡、仮名遣いの誤り、それとわかる誤写、やや長きにわたる脱文などによってのみ、本文のよしあしを決めることは、極めて難しいように思われる。既に、『ごゑつ』には(マヽ)印が付されており(右の対校表では無視した)、更に加うるべき箇所も見受けられるのであるが、国王の勾踐・夫差に問題はないが、重要人物である伍子胥や范蠡の漢字が、現われてこなかったり誤写であったりまた仮名書きであったりするのは、良質な本文とはなんとしても言い難い。しかしながら、この種の絵巻や奈良絵本には、しばしば見られることなのである。A本とB本と、なぜ酷似の本文を有するのか、その答えは、簡単に明瞭である。『ごゑつ』を一読すれば直ちにわかることだが、どこかで何かで接したことのある本文を、そのまま、殆んどそのまま、写しているのである。

『太平記』巻四「備後三郎高德事付呉越軍事」に、「天莫^レ空^ニ勾踐^一、時非^レ無^ニ范蠡^一」の「詩ノ心」としてかなり長々と引かれている呉越の軍の物語は、殆んどそのままのかたちで、『三国伝記』巻六第十一「呉越戦事」に承けつがれている。呉越軍のことは、『曾我物語』巻五「呉越のたゝかひの事」(十二行古活字丹緑本、日本古典文学大系88所収)にまで承けつがれている。これら三者間の書承関係を一口で言うのは難しいが、『太平記』と『三国伝記』とは頗る近く、やや離れて『曾我物語』があると言えようか。問題は、絵巻の詞章が、『太平記』に拠ったのか、『三国伝記』に拠ったのか、あるいは、それらのいずれでもなく、両書の混態本のごときものに拠ったのかに絞られてこよう。

細かい部分まで、絵巻の詞書がA本と一致しているかと思えば、その逆の場合もある。いずれの例が多いかによって依拠した本文を批定することは不可能であるから、別の方法に頼るしかあるまい。

呉の国の忠臣・伍子胥のことは、『伍子胥伝』一卷の名が『日本国見在書目録』にも見えていることから、まとまったかたちで我が国に将来されていたと考えられるが、呉越軍の物語で、呉王・夫差に誅せられた後の一条が、A本・B本においては、やや長い異文で目にとまるところである。

——さためてやかてわか身のうへと心得てたかひに心をきあひようしんをしくちをとちてをのかありかへひきてきひしく身のようしんするより外のことはなく——(A本)

——さためてけいごのぶしあらんとたかひにもんこをとちてようしんきひしくしてこゝろをゆるす事なし(B本)

——斯リシ後ハ君悪ヲ積ドモ臣敢テ不_レ献_レ諫、只群臣口ヲ噤ミ万人目ヲ以テス(『太平記』卷五)

右に相当する箇所を、念のため『曾我物語』から引いてみると、

——しかうして後、悪事いよくつもれ共、伍子胥が果を見て、あまていさむる臣下もなし。あさましかりし有様なり(『曾我物語』卷五)

とある。なお、△呉越の戦ひ▽は、『平治物語』下「頼朝遠流に宥めらるる事_付けたり呉越戦ひの事」(全刀比羅本・古活字本、ともに日本古典文学大系31、昭36)、同下「頼朝被宥遠流事_付呉越戦事」(京師本、古典研究会叢書第二期『平治物語 下巻』、昭49)などにも見えている。こちらは、簡潔なかたちになっているが、語り方にはいろいろと出入りがある。囚われ人となった越王勾踐が呉王夫君の尿を_{いばり}呑み、「わが為に恩ある者」として助けられたこと、故郷へ還る折道にて蛙が_{かわず}躍り出たこと、遂に会稽の恥を雪めたことのみを、「ある人」が申したというかたちをとるのが全刀比羅本、呉国を攻むるに当たって、三ヶ条につき忠臣范蠡が諫言をしたこと、姑蘇城の獄中に苦しむ勾踐を范蠡が「商人の真似をして」一匹の魚を獄屋へ投げ入れたこと、「石林」をなめて本国へ還る時、行路に蛙が躍り出たのを、勾踐が下馬して拝したこと、「石林の味をなめて会稽の恥をきよむ」という俗の諺でとめること等を含むのが古活字本という具合である。『太平記』・『三国伝記』・『曾我物語』の「石林」(奈良絵本・絵巻ともこれを踏襲する)が、なぜ、他方では「尿」_{いばり}になってしまったものか、これは、ほんの一例にしか過ぎないが、詳細に校異をとること

を試みるならば、他にもいろいろと問題が出てくることであろう。

奈良絵本『ごゑつ』と絵巻『呉越』との対校表を見て、本文全体の表記を推測することは危険であるが、まず素直な態度で接してみて、いずれも、まことにずさんな本文であるということに、容易に氣づくことであろう。勾踐・夫差・西施・范蠡・伍子胥・大夫種などの重要人物名が、漢字で統一されて表記されていないことなど、今日の我々からみると、むしろ不思議でさえある。接続助詞「て」の有無などは、本文理解の上でさして問題ともなるまいが、仮名遣いの誤り、脱字・脱文、語法上の間違いなど、およそ本文校訂の上で問題となるような事例は、悉く含んでいる。もとの絵本がそうであったのか、はたまた筆写する人の誤写であったのか。とにかく不正確極まりない本文で、これは、奈良絵本も絵巻も甲乙をつけ難い。殊更、近時、文学作品の表記のスタイルが問題とされているが△註4▽、当然のこととして、その方面から見ても、まことに粗雑な表記法であるといか言いようがない。これら、絵を伴う御伽草子の作品群が、絵屋で製作されたものか、はたまた扇屋で量産されたものか、いずれにせよ、絵草子が製作される場でことに従う工匠をも含めて、その素養は、流麗な筆致、典雅な絵様とは似つかわしくないほどに、浅いものであったとしか考えられないのである。

右の対校表を見て、より正しいことば遣いは、Aの奈良絵本の方かBの絵巻の方かということになると、これも優劣はつけ難い。これら二本に加うるに、『太平記』の本文をもつてくると、数の上では圧倒的に絵巻の方が奈良絵本よりも近似の位置にあることが知れる。しかし、絵巻『呉越』が『太平記』に拠ったのではなく、A本やB本以前と『太平記』との間には然るべきテキスト群が存在したものであろう。そういうものが幾種類かあって、奈良絵本と絵巻とが同一のテキストに拠ったものではないであらうことも、ほぼ確実であらうと推測する。

ごく短いかたちで要約してある『平治物語』の「呉越戦ひの事」までが引いている、范蠡が魚売りの「真似」をして牢獄近くまで出向いて行って、魚を一匹投げ入れたといういわゆる△堅田鮒▽の説話類型だけを採りあげてみても、問題はいくらかも抽き

出せよう。『宇治拾遺物語』第百八十六話、『新選和歌六帖』卷三、『夫木抄』第二十七などに見えており、渋川版『猿源氏艸昏』もこれを引き、鯛売りの猿源氏が舅の南阿弥陀仏に對つて滔々と語りかけている。このやや物騒な説話は、おそらく八腹中在刀譚▽とでも呼弥すべきものの、例えば、『太平記』卷二十三「大森彦七事」に見える悪七兵衛景清が長門壇の浦で海へ落した刀を江豚が呑んだという類のはなし、これの本説は海彼の国の典籍であつたと思われ、『玉塵抄』でも、『史記』・『呉越春秋』・『博異志』などから引用し「奇異事ゾ」と言っているが、そうした説話とも関わりがあるものであらう。范蠡が魚売りの「真似」をして城郭内の奥深く入つて行つたという語り口にも、なにか魚売りの特別な生活慣習があつたものと考えられ、近時、西村聰氏が精力的に調査されたかの術婆迦説話の主人公も、魚売りである。△註5▽青春時代に読んだ『チボー家の人々』にも、△堅田鮒▽のごとき一節があつたように記憶する。

いま一ツの話型、『蒙求』四八にいう「伯牙絶絃」は、京祇園会の作り物にもされているが、『蒙求和歌』に「イカニセム昔ノトモ、琴ノヲモカキタエニケル心ホソサヲ」とある。

呉越の戦いが、『太平記』や『三国伝記』が引けば、中国説話として扱うのが普通であらう。Aの『ごゑつ』やBの『呉越』は、御伽草子の範疇に収めて誰も怪しまないのは、これらが絵を伴っているからである。このような例は他にいくらかもある。御伽草子『硯破』も最も肝要なる部分、中太ノ三郎があやまって硯を破ってしまう一条を、そっくり先行の仏教説話集『撰集抄』に負っている例、御伽草子絵巻『祇王』の一本が、八坂系の『平家物語』をそっくり借用している例など△註6▽、挙げてみることできよう。佐竹昭廣氏は、『宇治拾遺物語』卷三の十六「雀報恩ノ事」を「御伽草子に仕立てた」『雀の夕顔』という奈良絵本（広島大学蔵本、古典文庫『室町時代物語』三所収）に言及されておられる。「依拠したこと歴然たる本文ではあるが、所々手を加えた箇所がある」という。△註7▽御伽草子が新たに創られてゆく経路が窺えよう。

一口に絵巻と言うが、現在遺されている最も多くのは、この『呉越』のごときかたちを有するものであるのは、周知の通り。即ち、天地凡三十数幅、一ツの作品を二軸か三軸の豪華なものに仕立てたもので、表紙は金欄緞子を用い、象牙の軸、見返

しには金箔を押し、本文の料紙にも金泥を用いて花鳥あるいは山水の下絵を描き、詞と絵とは分かれていて、詞書も多くはやや大ぶりの文字、漢字交じり平仮名文であるが、漢字表記に統一もなく、時として、漢字に訓みがなをつけることもあり、文末で料紙が余る具合だと、散らし書きのように改行を多くして、行をふやして書き、絵も多くは上・下部をすや、霞で区切り、何よりの特色は、金箔・金砂子などを装飾用にいっぱい用いてあることで、裏打紙にまで砂子を散らすのが普通であって、画面の絵も土佐派・狩野派の場合がもっぱらで、製作の時期は、江戸期も下って凡そ寛文年間とされているものである。同じ表紙、同じ画面に接することがあるから、量産されたものであつたろう。この寛文年間という時期が、間似合紙を用いたいわゆる横本の奈良絵本がつくられた時期と重なることに、注目すべきであらう。これら寛文年間の製作とおぼしき絵巻は、身近にあるもので、中野幸一氏編『奈良絵本絵巻集』（昭62／平1）に収められている影印により、凡そ見当をつけてみることできよう。即ち、『長恨歌』上中下、『長恨哥』上中下、『武家はんじやう』上下、『大江山絵巻』三巻、『きようしゆん』上下、『蓬萊絵巻』上下などは、大和絵の描法による絵巻で、奈良絵のそれとは明らかに異なるものである。松本隆信氏編『増訂室町時代物語類現存本簡明目録』に、『寛文』中、軸」などと掲出されているものである。

なお、本学図書館蔵『呉越』は、函に入っている（蓋の寸法、凡三八糎×二四・四糎、深サ十八糎）。蓋の表に「呉越絵 三巻」とある。絵とは勿論絵巻のことで、「仁和寺絵目録」に見える三十種の絵巻も、悉く「絵巻」と記されている。

註1 昭和六十年六月「一誠堂古書目録」第六十一號、『史漢物語』五卷、慶長七年吉田家梵舜等筆、梵舜自筆奥書有、孤本」とある。目録の「黄帝^{クワウテイ}、漢昭帝^{カンシヤウ}」から「秦始皇^{カンシヤウ}封禅松樹授任」とか「周幽王^{クワウテイ}褒姒亡国」とか「趙高指鹿稱馬^{クワウテイ}」などを見て、説話集・類書としての本書の性格が窺えよう。本文冒頭は、「史漢物語第一／史記ハ漢太史令司馬遷カツイル所也 上黄帝ノ時ヨリ下／漢武帝ノ大初年中マテ三千余年カ間ノ夏ヲシルセリ 十二本紀十表八昼廿世家七十列傳アハセテ百廿卷也」、奥に「右端廿九枚予書奥方仰他筆ノ写者也／慶長七丑寅歳七月朔日 梵舜（花押）」とある。

2 『美術研究』一三八号所収。絵巻物を扱うに際して、まず活用すべき必須の目録である。

3 解説に「御伽草子風の本としては、本書のほかには伝本は見ない」とある。

- 4 漢字講座6『中世の漢字とことば』(明治書院、昭63)。
- 5 西村聰氏「百夜通い説話考」、『國學院雜誌』(昭60・8)。
- 6 例えば、ニューヨーク市立図書館蔵「祇王物語」二軸。
- 7 佐竹昭廣氏「『宇治拾遺物語』・『雀の夕顔』」、『陽明叢書』国書篇月報12(昭52・12)。

(國學院大學文学部教授)